

会員交流委員会だより

第16回 aaca 長野・松本・茅野地区建物視察会



日本建築美術工芸協会法人会員
株式会社梓設計 CX室
斎藤 博太郎

長野から松本、茅野まで10月28日より2日間、バス移動で恒例の建物視察会に参加させて頂きました。建物視察会の基本コンセプトの1つとして掲げられておられる「設計者や施設に深く関わる方に現地解説して頂く」という主旨の元、プランツアソシエイツ宮崎浩氏、松本透長野県立美術館長、東京大学名誉教授藤森照信氏に現地で解説を頂くという貴重な機会を頂き、充実した視察会に準備頂きました皆様へ改めて感謝の気持ちでいっぱいです。僭越ながら見学感想文を寄稿させて頂きます。

まず1日目は長野県立美術館～安曇野ちひろ美術館～高橋節郎記念館～碌山美術館といった工程でした。

・長野県立美術館（プランツアソシエイツ）



2021年に竣工し日本建築学会賞、AAC賞など多数の受賞歴がある話題の建物を宮崎浩氏と松本透館長に御案内頂いた。敷地は善光寺と正対し谷口吉生氏設計の東山魁夷館に隣接、元々は林昌二氏の信濃美術館があった場所であり、とてもない緊張感のあるプロジェクトであったことは想像に難くない。そのような状況において善光寺の軸と東山魁夷館の軸からなる2つの都市軸を設定し、既存の名建築を引き立てると同時に新設美術館は敷地の高低差を活かし、そっと置かれているような佇まいに感銘を受けた。美術館計画として施設内の大部分がフリーゾーンになっており、松本館長の公共施設の運営に対する姿勢に強い尊敬の念を抱いた。また外装、階段、展示天井など細部にわたり極めて完成度の高いデザインが施されているのと同時にランドスケープと一体感のある空間構成が大変勉強になる建築であった。

・安曇野高橋節郎記念美術館（プランツアソシエイツ）



長野から松本に向かう移動の途中で急遽見学をすることになった宮崎浩氏の作品。事前予約もなく突然の訪問にも関わらず、学芸員の方が宮崎浩氏を見るやいなや氏に駆け寄り、氏に

挨拶をされていた光景を目の当たりにし、施主と建築家の幸せな関係が良い建築を作るための必要条件であることを改めて感じさせられた。急な訪問であったこともあり外部空間をメインとしての見学になったが、田園風景に囲まれた場所に立つ建物としてボリュームを感じさせない構成、水盤と一体の端正なデザインがとても印象的な施設であった。当日水盤がメンテナンス中ということで、水景のない中での見学であったため、別の機会に水盤のある状態でまた訪れたいと思った。

長野県立美術館・安曇野高橋節郎美術館の2作品を宮崎浩氏に現地解説を頂き、大変勉強になったことはいうまでもないのだが、何よりも氏のプロジェクトに対しての熱量と建築家としての姿勢に強い感銘と同時に襟を正す思いであった。

・安曇野ちひろ美術館（内藤廣建築設計事務所）



1997年竣工の絵本美術館で、連続する小さな切妻屋根の建物と遠くに見える白馬連山の風景が呼応した建築である。左官仕上のRC土台に製材からなる木架構の屋根がかかりアーチ状の木部材が棟を受ける架構が印象的で美しかった。

・碌山美術館（今井兼次）



彫刻家の萩原碌山の作品が集まる美術館である。複数棟からなる構成でそのうち教会風のかたちをした碌山館が今井兼次氏の設計。色と形が不揃いな煉瓦の壁がつたで覆われているその佇まいは、まるでジブリの世界に迷い込んだかのような錯覚を受ける。

最近の話題作から近代の名建築まで大変充実した1日目の視察工程を終えて松本駅前のホテルに宿泊した。

2日目は松本市美術館～片倉館～神長官守矢史料館、高部公民館、高過庵、低過庵、空飛ぶ泥舟、茶屋「五庵」を巡る1日目と同じく濃密な工程でした。

・松本市美術館（宮本忠長建築設計事務所）



2002年竣工の宮本忠長建築設計事務所設計による美術館である。中庭を囲うようにボリュームの大きな本館と別棟のスケールが抑えられたことでも創作室・カフェが配され、中庭の抜け感が気持ちの良い空間であった。

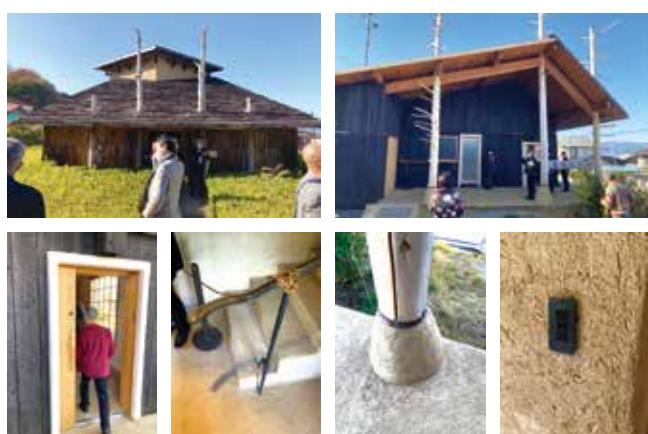
エントランスロビーから広がるホワイエは半透明のカーテンウォールから自然光が透けて満たされる大空間は建築としての見どころの一つであった。

・片倉館



諏訪湖に面して建つ国指定の重要文化財で現役の浴場施設である。洋館風の意匠が印象的な建物で資料室のある会館棟と貸広間を見学させて頂く。現役の施設のため有名な千人風呂の見学は叶わなかったが、貸広間の木格子天井とモダンな照明、洋風の格子窓と内部の木造和室大広間等見応えのある和洋折衷の空間であった。

・神長官守矢史料館、高部公民館（藤森照信）



茅野市高部地区出身の藤森輝信氏が設計したフジモリ建築をご案内で見学させて頂いた。フジモリ建築の特徴のひとつ

であるひとの手作業の痕跡が残る建物は、モノづくりの初心に帰る気持ちにさせられる思いである。自作の焼杉壁、丸太柱と基礎をつなぐ銅板プレート、藁を練りこんだ三和土、打出し加工の鉄板スイッチプレート、和紙の照明、開けた蔀戸を支える小枝方杖など枚挙に遑がないが、氏の創意工夫が溢れる建築であった。

・高過庵、低過庵、空飛ぶ泥舟、茶屋「五庵」

（藤森照信）



昨今一般メディアでもよく目にする藤森氏の設計した茶室である。各施設とも小規模であったことから、5班に分かれての視察となった。筆者の班では茶屋「五庵」にて藤森氏と一緒に梯子を上り、庵から臨む八ヶ岳の思い出のお話を聞くことのできる機会に恵まれ、純粋に楽しい経験であった。

また各茶室の見学の合間に藤森氏の生家にお伺いし、氏のデザインしたテーブルセットや土間の茶室を見学させて頂いた。またその際、奥さまからお茶をごちそうになるなどお気遣い頂いた事についても、この場をお借りして改めて御礼を申し上げたい。

2日間の視察会を通して、天候にも恵まれて、紅葉の色づく信州の風景、aaca会員の皆様、宮崎浩氏との交流楽しむことができ大変満足の経験でした。



建物視察会に参加して

学習院大学
日本建築美術工芸協会会員 田上 竜也

10月28日、29日の2日間、「第16回aaca建物視察会2022-長野・松本・茅野地区」に参加した。初日朝、長野駅に集合。気持ちのいい秋晴れで、長引くコロナ禍のなか本格的なツアーを待ち望んでいたかのように大型バスに満載となった参加者ともども、旅行気分はいやが上にも高まる。

最初の目的地、長野県立美術館では、設計者の宮崎浩氏と松本透美術館長による解説を聴きながら館の内外を周るという、贅沢な機会となった。レセプションルームでの説明後、全員で幻想的な霧の彫刻を体験し、それから館内を巡ったが、美術館は無料のオープンスペースを広く取り、外の庭園を含め市民に開放された空間で、3階屋上庭園やガラス貼りエレベーター内などの随所から、以前ははっきり見られなかった善光寺の側面全景を見渡すことができる。美術館本館と善光寺、神社、東山魁夷館との関係性が緻密に計算されており、東山魁夷館に対して正面を向いた連絡ブリッジや、階段手摺の形状に至るまで谷口建築との調和を図っている。展示替え期間中の展示室を特別に上から眺めた後、バックヤードを見学させていただいたが、応接室の壁面に張られた信州紬や、漆塗りのテーブル、さらにジオ・ポンティの椅子が置かれたトイレなど、隅々までデザインされた空間に感銘を受けた。既存の環境を破壊することなく、景観を整理しつつ新たな魅力とともに再創造し、さらに建て替え以前にあった林昌二による長野県信濃美術館の部材を一部移設するなど、過去との連続性にも配慮を尽くした建築を感じた。



続いて車内で弁当を食べながら、場所によってはかなり紅葉の進んだ景色を窓外に見やりつつ、安曇野ちひろ美術館（設計・内藤廣）へ移動する。2班に分かれてまず美術館スタッフにより建物外観と館内を案内された。山の稜線と

合わせたエントランスの切妻や、自ら内藤氏に手紙を書いて志願したという中村好文氏デザインの椅子などについて説明を受けた後、自由見学となった。自治体が広大な敷地を提供することで誘致した美術館だが、その空間全体のランドスケープ含めて内藤氏の手になるものであり、トットちゃんゆかりの電車教室、ちひろの別荘などを巧みに配置した遊歩道を楽しみながら散策した。



次に訪れた穂山美術館では、今井兼次の代表作である、教会を模した展示棟のみならず、その後に建てられた数館を巡り、萩原守衛や高村光太郎による、日本近代彫刻黎明期の作品群を鑑賞した。

さらに予定外のサプライズとして、近隣にある宮崎氏の代表作のひとつ安曇野高橋節郎記念美術館を訪問した。周囲の木々の高さを超えない控えめながらも端正な建築で、あいにく閉館間際のことで展示スペースには入らなかったが、庭や建物外観を見学した。思わず宮崎氏の訪問に、美術館スタッフの方々もいつまでも興奮させやらぬ様子だった。

松本のホテルに到着し、その夜はコロナ感染対策として、全体での懇親会は開かれず、銘々が街に繰り出すこととなった。後で聞いたところでは店により旅行支援クーポンの扱いはまちまちであったようだが、個人やグループで、みな信州の夜を満喫したことである。

2日目も初日に引き続き、これ以上ないほどの旅行日和となった。ホテル前から出発したバスは、まず市内の松本市美術館（設計・宮本忠長）に向かう。松本出身の草間彌生作品を中心に据え、建物正面ガラスや飲料の自動販売機にまで水玉をあしらった演出は趣味の分かれるところだが、外国からの訪問客も数多く目にし、観光客誘致には成功している印象を受けた。



その後バスは、松本を後にして諏訪方面へ。途中、下諏訪町立諏訪湖博物館・赤彦記念館（設計・伊東豊雄）を窓外に望む。陽光に輝く建物は広大な諏訪湖の各所より眼にすることことができ、一帯のランドマークとなっている。

バスを降りて訪れた上諏訪の片倉館（設計・森山松之助）は、諏訪市文化財担当や施設ガイドの方々のご案内で、和館大広間の大空間や、屋根のシェブロン模様についての解説を受けた。営業時間中のことであり、名物千人風呂の見学はかなわなかったが、何人もが再度の訪問と入浴とを期していた。

続いて茅野に到着後、まず発酵パークに立ち寄り、発酵食品で構成された創意あるランチを食したのち、何人かは土産物を覗いたり、どぶろくを豪快に注いだソフトクリームを賞味したりしていた。

それからいよいよ2日目の目玉といえる藤森照信氏の建築めぐりだが、まず高部公民館では、藤森氏ご自身の飘々とした解説により、焼杉は男性、照明は女性が担当するなど、地域の人々と共同で作られた経緯を知ることができた。道を行く御柱を見るため、木の枝で固定する突き上げ窓の単純ながら味のある工夫には、思わず笑みがこぼれた。

神長官守矢史料館に移動し全員で見学した後は、少人数毎のグループに分かれて点在する茶室群を回り、藤森氏や共同設計者の吉川一久氏に解説いただいた。空飛ぶ泥舟や高過庵の揺れっぷりを歓声、悲鳴まじりに実地体験し、屋根がスライドする低過庵の仕掛けに驚嘆するなか、同行した宮崎氏のはからずもおっしゃった「建築するのが馬鹿らしくなる」という言葉は、藤森建築への最高のオマージュと受け取れた。我々のグループが最後に訪れた藤森氏の実家では、奥様に懇切に応対していただいた。玄関をその場で茶を提供可能に転用した玄庵や、龍を描いた襖絵、角を

生やした「王様の椅子」の置かれた食堂など、まさに藤森ワールド炸裂である。



最後は茅野駅で解散となったが、個人的にはひさしぶりの大勢での団体ツアーデ、会員の方々はじめ、多くの参加者と交流することができ、とりわけ宮崎浩氏と藤森照信氏のお話を実地にうかがえたことは得難い経験となった。コロナ禍のいまだおさまらぬなか、細心の注意を払いつつ旅行を企画いただいたみなさまには、あらためて感謝申し上げる。

